

フリーマーケットのゆくえ —現状とこれから—

奥塚 麻衣

週末になると、都内各所でフリーマーケットが開かれている。老若男女で賑わうその場に、人々は一体何を求め、今後、フリーマーケットは人々の生活の中でどのような位置を占めていくのだろうか。この問題意識に基づき、東京23区を対象地域に、フリーマーケットに関する質問票調査と、主催団体への聞き取り調査をおこなった。

現在のフリーマーケットは様々な形態に分類でき、それによって来場者の雰囲気もまったく異なってくる。東京23区では、区によってフリーマーケット開催状況に偏りが存在する。足立区、大田区、江東区、渋谷区、杉並区、港区は開催数が多いものの、逆に荒川区、台東区、千代田区、豊島区、文京区は開催数が少ない。また、フリーマーケットの規模も区によって異なる。これらには様々な要因が考えられるが、フリーマーケットの主体である「人とモノ」を集めることができる場所が区内に存在するか否かが、重要な点となって

くるのである。

質問票調査によると、回答者の74.3%は何らかの形でフリーマーケットに参加したことがあり、フリーマーケットを「リサイクル活動」ととらえている人が30.0%あった。しかし、フリーマーケットには本来、リサイクル活動といった意味合いはない。「お店屋さんごっこ」をする中で、参加者の誰もが無意識のうちにリサイクル系の中に含まれていくという程度のものである。今後、フリーマーケットは、リサイクルといった大義名分よりも娯楽イベントという特徴を前面に押し出す方が、より多くの人々を集められるだろうし、人々の生活の中に1つのイベントとして認識され定着するのではないだろうか。

フリーマーケットの持つ多義性・多様性が、多様な価値観を満たし、フリーマーケット自体の存在を確立していると考ええる。

離島地域の特性とそこから考える振興策 —長崎県五島列島下五島地域を事例に—

川邊 朱里

日本の離島は、人口減少という大きな問題を抱えている。その原因には、本土からの隔絶性、狭小性などの地理的条件が大きく関わっており、この条件を克服する事は容易ではない。

本論文では長崎県五島列島下五島地域を対象とし、離島地域の特性からその振興法について考察した。研究は、下五島出身者へのアンケート調査と、現地調査によった。アンケート調査では「関西五島人会」（関西地方在住の五島出身者の団体）の協力を得て、下五島に足りないものや振興のために必要なことを島の外からの視点で発見するために、出身地を出た理由や今後の予定、出身地に対する思い等を尋ねた。また現地では、行政の立場からの振興策や方法を尋ねた。

その結果、島を離れた人々にも、故郷に対する帰属意識や思い入れが非常に強いということがわかった。多くの人が故郷の衰退を危惧し、故郷発展のため何か役に立ちたいと考えている。一方、

行政側では、その立場上、思いきった対策が取れないという印象を受けた。継続的な振興につながる策はなかなかないようである。

筆者は、離島振興策として、故郷を離れた離島出身者の活用を提言する。出身者を呼び戻して定住人口とするだけではない。全国各地にいる出身者を島の宣伝に活用する、帰省や観光を促し流入人口の増加につなげる、島の外からの視点で振興策と一緒に考える、など、様々な事に貢献してもらおうのだ。そのためには、出身者が気軽に帰郷できるように、交通費の一部を行政が負担したり、希望者に住宅や仕事を斡旋するなど、行政側のサポートも必要となってくる。

人口流出が激しいという事は、それだけ全国に離島出身者がいるという事である。この現状を活かし、離島発展に出身者を利用すれば、ここに、離島振興の可能性が見えるかもしれない。